

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32635

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00063

研究課題名(和文) 密教の諸実践に通底する原理としてのアーヴェーシャ(憑依)の研究

研究課題名(英文) A study on avesa as a fundamental principle of Tantric Buddhist practices

研究代表者

種村 隆元 (Tanemura, Ryugen)

大正大学・仏教学部・教授

研究者番号：90401158

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、個人的瞑想実践や公共分野における諸儀礼に通底する原理としてのアーヴェーシャ(憑依)の内容や機能に関して、中期インド密教を代表する経典である『真実撰経』およびその註釈文献等を精査することにより以下の点を明らかにした。(1) アーヴェーシャは実践者の身体、とりわけ心臓に仏あるいは仏の智が入ることを中核とする。(2) 『真実撰経』の説く4種類の印は、アーヴェーシャを引き起こすための手段として機能する。(3) 現世利益の実践(宝蔵の発見、病氣治療など)にもアーヴェーシャの技法が応用されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題により、これまで注目されてこなかったアーヴェーシャ(憑依)が密教実践の中核(の1つ)をなすことが明らかになるとともに、仏教を「理性を超えたもの」から研究する視点を与えたことは、今後の当該分野の研究にとって意義深いことであると考えられる。また、時代的に離れた人々の感性に触れることで、現代人の精神世界を豊かにするための一視点を得たことは、社会的にも意義あることであると思われる。

研究成果の概要(英文)：This study has examined contents and functions of avesa (possession), as a fundamental principle of Tantric Buddhist practices, both in private and public domains, on the basis of philological analysis of the Sarvatathagatatattvasamgraha, its exegeses, and other related literature. (1) The core of avesa is entry of Buddha(s) into the body, especially the heart, of a practitioner. (2) The four kinds of mudra (seal) work as tools of avesa. (3) The techniques of avesa are applied to mundane ritual practice (e.g. discovery of treasure, cures for diseases).

研究分野：インド密教

キーワード：インド密教 アーヴェーシャ 憑依 『真実撰経』

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

密教は5世紀からインドの宗教のメインストリームとなってきたタントラの宗教(タントリズム)の流れの中に位置づけることができる。密教は、シヴァ教など他のタントラの宗教と同様に、マンダラ・マントラ(真言)・ムドラー(印契)といった「装置」を伴う、極めて象徴性の高い秘儀的なヨーガを中核として様々な実践を形成し、それらの実践に従うことにより現世において解脱を始めとした宗教的な目的が達成されること約束した。密教は、経典が主として規定するこれら実践者個人の目的を達成するための「自身のための実践」とは別に、主としてマニュアル(儀軌)のレベルにおいて、施主の目的の達成のために行われる諸儀礼、いわば「他者のための実践」も整備してきた。これらの「他者のための実践」は、多くは公共の場で執り行われるものであり、上述の「自身のための実践」のもつ秘儀的なイメージとは非常に対照的なものである。

密教は、このように「自身のための実践」「他者のための実践」という領域において、様々な(時として種々雑多に見える)実践を発展させてきたが、これら一見すると相互に無関係にも見えるこのような諸実践の一つのまとまった体系として成り立たせる、諸実践の背後にある原理に関してこれまで研究されることはなかった。

### 2. 研究の目的

本研究課題では、上記の研究背景のもと、アーヴェーシャ(憑依)に着目し、その機能を文献学的に解明することを目的とした。「自身のための実践」である個人的な瞑想実践(ヨーガ)において、実践者は仏の智のアーヴェーシャにより仏となり、「他者のための実践」である尊像奉納儀礼では、尊像への仏の智のアーヴェーシャが施主に対する利益を保証する。弟子に両実践領域における諸実践の許可を与える入門儀礼(灌頂)では、弟子への仏の智のアーヴェーシャが必須条件となるのが、アーヴェーシャを研究トピックとして取り上げた理由である。

### 3. 研究の方法

(1) アーヴェーシャの概念を、中期インド密教の代表的な経典であり、始めて仏の智のアーヴェーシャによる成仏を明示した『真実撰経(初会金剛頂経)』とその註釈文献類に基づき明らかにする。ここには、原典の校訂テキスト作成、および詳細な訳註の作成が含まれる。

(2) 中後期インド密教において発展した、『真実撰経』の体系をベースに作成された儀礼マニュアル(儀軌)類の精読を通して、アーヴェーシャの役割を明らかにする。

(3) 『真実撰経』の説くアーヴェーシャの概念とシヴァ教のアーヴェーシャの概念との影響関係を検討する。

### 4. 研究成果

本研究課題の成果は、研究代表者である種村、研究分担者である Vasudeva および Shakya の各個人の研究によるものである。

#### (1) 校訂テキストおよび訳註

『真実撰経』のサンスクリット語原典の再校訂および訳註作成。アーヴェーシャに関連して、当該経典の以下のセクションの再校訂テキストおよび訳註を公刊した。第1章「金剛界大マンダラ」中「大印」セクション；同「成就が生じるための印に関する智」セクション；第7章「降三世大マンダラ」中「病魔の調伏」セクション。

#### (2) 個人的瞑想実践におけるアーヴェーシャ

① 『真実撰経』第1章では金剛界大マンダラの観想法が説かれる。この観想は「最初のヨーガ」「最も勝れたマンダラの王」「最も勝れた行為の王」という3つの「三昧」と呼ばれる観想段階から成る。このうち、「最初のヨーガ」における大印の実践において、アーヴェーシャの要素が確認できる。そこでは大印を用いることにより、すべての仏を実践者自身の身体に引き入れることが説かれている。

『真実撰経』に対する註釈書である『真実作明』『コーサラ莊嚴』を参照するならば、アーヴェーシャとは「存在」あるいは「存在である金剛」が実践者の身体に入り込むことであり、またアーヴェーシャする「存在」は「尊格」とも言い換えられている。

② 大印を使用して身体に引き込まれた諸尊格は、警戒印（三昧耶印）・法印・羯磨印により印付けられ、身体の所定の位置に布置され、そのことにより実践者の身体がマンダラとして機能することになる。いわゆる身体マンダラであるが、この身体マンダラの完成、すなわち尊格の身体への引き入れ＝アーヴェーシャに印が大きく寄与することが明らかになる。これまで印に関して「尊格を象徴するもの」という理解はあったが、それに加えてアーヴェーシャに使用される「道具」でもあることが明らかになった。

③ 『真実撰経』第1章「金剛界大マンダラ」の実践手引書である『すべての金剛の源』では、「最初のヨーガ」における「自加持」の実践を説いている。この自加持とは、瞑想中で金剛界大マンダラを作り出し、そのマンダラにおいて灌頂を受かるプロセスである。このプロセスにおいて、実践者は自らにアーヴェーシャを引き起こし、マンダラに花を投げ（投花）、自らの本尊が決まる。しかもその本尊は実践者自身であるところのマンダラの中尊であるビルシャナである（つまり、自分で自分を加持するので自加持という）。このことから、アーヴェーシャは実践者を尊格、あるいは尊格に合一するに相応しい者に変容させる機能を有していることが分かる。

④ 『真実撰経』においてアーヴェーシャは、実践者に「変容」をもたらすものであるが、それと同時に菩提をもたらす要因とされていることが明らかになった。これは、『真実撰経』の冒頭部における一切義成就菩薩の成道がアーヴェーシャの記述と一致すること、そして、金剛界大マンダラの観想における金剛焼香の讃歌から分かる事柄である。

## (2) 入門儀礼におけるアーヴェーシャ

① 『真実撰経』に規定される入門儀礼（灌頂）において、入門者はマンダラに花を投げ入れ、本尊を決める際に、アーヴェーシャの状態に入ることが要求される。『真実撰経』第1章「金剛界大マンダラ」の儀礼手引書である『すべての金剛の源』によれば、ここでのアーヴェーシャは必須事項である。

② アーヴェーシャを引き起こすための手段として、焼香および鈴が使用されることが、『真実撰経』および註釈文献により示唆されている。金剛焼香の讃歌に、焼香は菩提をもたらすことが説かれており、また金剛鈴は「金剛アーヴェーシャ」と呼ばれ、その機能がアーヴェーシャであることが分かる。アバヤーカラグプタ著『金剛鬘』における入門儀礼としての灌頂の規定では、焼香と鈴を使用して入門候補者に憑依を起こさせる方法が説かれている。

## (3) 諸儀礼におけるアーヴェーシャ

① アーヴェーシャは成仏を目的とした瞑想実践の場に限られたものではない。『真実撰経』第1章「金剛界大マンダラ」の「成就が生じるための印に関する智」セクションでは、実践者が自らにアーヴェーシャを引き起こし、様々な成就（宗教的目的）を達成することが説かれている。ここでの成就是、地中にある宝蔵の発見、空中飛行などの現世利益的、あるいは超自然的なものであり、『真実撰経』の前時代の初期密教経典に多く見られるものである。初期密教経典においては、アーヴェーシャを引き起こす対象、すなわち依代が童男童女などであるのに対し、実践者自身が依代であることに特徴があると言えよう。

② アーヴェーシャは病氣治療、すなわち印とマントラを用いた病魔の除去にも使用される。このことは、第6章「降三世大マンダラ」中「病魔の調伏」セクションに対する、註釈書（『真実作明』）の記述から明らかである。この「病氣治療」は、印とマントラを使用して、病人の体内を忿怒尊で満たすことを特徴とする。また、その際、病人の身体が光線で満たされることが説かれる。この「身体が光線で満たされる」ことは、弟子の入門儀礼としての灌頂におけるアーヴェーシャにおいても見られる事柄である。同様の実践は、後期インド密教の先駆的経典である『サーマーヨーガ』にも規定されている。

## (4) シヴァ教、現代のカトマンドゥ盆地の密教におけるアーヴェーシャ

密教やシヴァ教において、チャクラ（一種の神経叢）や脈管よりなる仮想的身体を想定するが、この仮想的身体は、そこに諸尊格が住するとされることから、アーヴェーシャと密接な関係を持つ。シヴァ教聖典の1つである『マーリニーヴィジャヨーッタラ』の第19、20章は、密教経典の『サンヴァローダヤタントラ』とのパラレルが見出される。

またアーヴェーシャの儀礼の1つに、処女を依代として使用するクマーリープージャーがあるが、この儀礼は現代のカトマンドゥ盆地の密教儀礼にも受け継がれている。

## (5) 結語

以上のように、個人的な瞑想実践から、「病氣治療」という現世利益的な実践にいたるまで、あらゆるレベルにおいてアーヴェーシャが重要な役割を果たしていることが明らかになった。密教実践におけるアーヴェーシャの働きがこれまでの研究で検討されることはほとんどなかったが、本研究課題の諸研究により、その重要性の一端が明らかになったことの意味は大きいと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 種村隆元	4. 巻 7
2. 論文標題 『真実撰経』 「金剛界大マンドラ」章所説の大印の実践 : Preliminary Edition, 和訳註, および内容分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 川崎大師教学研究紀要	6. 最初と最後の頁 (35)-(88)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 種村隆元	4. 巻 31
2. 論文標題 『金剛頂経』は「悟り」をテーマとしているのか? : 密教と現世利益	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代密教	6. 最初と最後の頁 (121)-(131)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sudan Shakya	4. 巻 6
2. 論文標題 The Namasamgiti: Composition, Content and Benefit	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Tri-Ratna	6. 最初と最後の頁 50-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種村隆元	4. 巻 69
2. 論文標題 Saravatathagatatatvasamgrahaの説avesa儀礼	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 智山学報	6. 最初と最後の頁 (71)-(97)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sudan Shakya	4. 巻 N/A
2. 論文標題 A Study on the Tri-ratna-Icon: The Buddha-Dharma-Samgha Triad Found in Nepalese Buddhist Pantheon	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 密教研究 (陝西師範大学宗教学集刊)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種村隆元	4. 巻 51
2. 論文標題 Sarvatathagatatattvasamgrahaにおけるavesaについて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 密教学研究	6. 最初と最後の頁 31-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 スダン・シャキヤ	4. 巻 83
2. 論文標題 ネパール仏教におけるヴラタ (vrata) について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本佛教学会年報	6. 最初と最後の頁 21-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sudan Shakya	4. 巻 2
2. 論文標題 A Study on the Tibetan Manuscript Transliterated in Devanagari Existing in Nepal	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of World Buddhist Cultures	6. 最初と最後の頁 141-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 種村隆元	4. 巻 13
2. 論文標題 『真実撰経』所説微細金剛ヨーガについて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 佛教文化論集	6. 最初と最後の頁 121-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 種村隆元	4. 巻 88
2. 論文標題 密教と病	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本佛教学會年報	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 種村隆元	4. 巻 50
2. 論文標題 <特集1 空海と世界哲学> 趣旨説明およびイントロダクション	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 比較思想研究	6. 最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計25件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 種村隆元
2. 発表標題 密教と病
3. 学会等名 日本佛教学會第92回 (2023年) 学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 スダン・シャキヤ
2. 発表標題 13世紀書写のネパール新出の仏教写本について
3. 学会等名 平安仏教学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Sudan Shakya
2. 発表標題 The Interpretation of Namasangiti: Focusing on the Newly Surfaced Manuscripts Possessed by the Newar Buddhists
3. 学会等名 XIXth IABS (国際仏教学会, ソウル) (オンライン) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sudan Shakya
2. 発表標題 衆生済度の在り方に関する考察 --ネパールに流布する仏教文献--
3. 学会等名 日本佛教学会(京都)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sudan Shakya
2. 発表標題 The Namasangiti and Dharmadhatumandala in Nepal Buddhism
3. 学会等名 Lumbini Buddhist University, Sugata Mahayana College, Lalitpur, Nepal (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 S. D. Vasudeva
2. 発表標題 The Kaula Yoga of the Malinivijayottara
3. 学会等名 Conference organized by Dr James Mallinson at SOAS (London) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 種村隆元
2. 発表標題 金剛頂経系密教におけるavesa
3. 学会等名 東京大学インド哲学仏教学研究室・インド語インド文学研究室第215回研究例会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sudan Shakya
2. 発表標題 A Study on the Tri-ratna-Icon: The Buddha-Dharma-Sangha Triad Found in Nepalese Buddhist Pantheon
3. 学会等名 The 4th International Symposium on Tantric Buddhism in China (陝西師範大学主催 第四届中国密教国際學術研討会、紹興市、中国) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 スダン・シャキヤ
2. 発表標題 「ネパールの仏教儀礼」
3. 学会等名 「儀礼の研究」(智山伝法院現代宗教研究室主催、東京) (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 スダン・シャキヤ
2. 発表標題 ネパールの仏教
3. 学会等名 世界の仏教を学ぶ-I・仏教伝道協会主催、東京（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 S.D. Vasudeva
2. 発表標題 Passages related to a form of proto-kundalini practice preserved in the Yogayajnavalkya
3. 学会等名 "SOAS Hatha Yoga Project Reading Workshop" in Portland Oregon, Sept. 16-25, 2019. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 S.D. Vasudeva
2. 発表標題 Discussion seminar
3. 学会等名 Early Yoga Project, Kyoto University (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 種村隆元
2. 発表標題 Sarvatathagatatattvasamgrahaにおけるavesaについて
3. 学会等名 第51回日本密教学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sudan Shakya
2. 発表標題 The Manjusri-Namasangiti and China-Nepalese Manjusri Bodhisattva Faith
3. 学会等名 The International Academic Conference on the 1400th Anniversary of the Tang 's Capital, Chang 'an : Dream-lingering Silk Road ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 S.D. Vasudeva
2. 発表標題 Systems of Wheels (cakra), Lotuses (padma) and Circles (mandalas) in Esoteric Saiva and Sakta Yoga
3. 学会等名 Special Seminar on " Sufism and Yoga " ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 S.D. Vasudeva
2. 発表標題 Read chapter 9 (adhyatmanirnaya) of the Yogayajnavalkya
3. 学会等名 Reconsidering the early history of Yoga and Samkhya ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 S.D. Vasudeva
2. 発表標題 The Cakra System of Early Kaula Yoga
3. 学会等名 Yoga, Movement, and Space ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年

## 〔図書〕 計8件

1. 著者名 D. Goodall, S. Hatley, H. Isaacson and Srilata Raman (eds.) Ryugen Tanemura et al.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 632
3. 書名 Saivism and the Tantric Traditions: Essays in Honour of Alexis G.J.S. Sanderson	

1. 著者名 Nina Mirnig, Marion Rastelli, and Vincent Eltschinger (eds.) Ryugen Tanemura et al.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Austrian Academy of Sciences Press	5. 総ページ数 610
3. 書名 Tantric Community in Context	

1. 著者名 長野泰彦・森雅秀編 スダン・シャキヤ他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 398
3. 書名 チベットの宗教図像と信仰の世界	

1. 著者名 廣澤隆之（監修）；武内孝善（責任編集）；川崎一洋；佐々木大樹；佐藤隆彦；種村隆元；他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 同朋舎新社	5. 総ページ数 385
3. 書名 曼荼羅集 興然編 下	

## 〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Ryugen Tanemura (academia.edu)  <a href="https://tais.academia.edu/RyugenTanemura">https://tais.academia.edu/RyugenTanemura</a>                  Sudan Shakya (academia.edu)  <a href="https://shuchiiin.academia.edu/sudanshakya">https://shuchiiin.academia.edu/sudanshakya</a>                  Somadeva Vasudeva (academia.edu)  <a href="https://kyoto-u.academia.edu/SomadevaVasudeva">https://kyoto-u.academia.edu/SomadevaVasudeva</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	SHAKYA Sudan  (Shakya Sudan)  (60447117)	種智院大学・人文学部・教授(移行)   (34308)	
研究分担者	VASUDEVA S  (Vasudeva Som Dev)  (10625594)	京都大学・文学研究科・教授   (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計6件

国際研究集会 国際オンライン研究会 (Kramakaumudi 講読)	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 科研研究会 (Sarvavajrodaya 研究会)	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 The Manuscripta Buddhica Workshop and the Vihara Workshop	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 後期インド密教文献ワークショップ 第2部	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Vihara 科研 (H30-H33) 第2回国内研究会	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Vihara 科研 (R4-R7) 国際ワークショップ	開催年 2023年～2023年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------